塾と教育

明日への一歩

2024 9

vol. 141

Open FREE

juku-kyoiku.com

さなるグループ創業者 佐藤イサク氏 追悼特集

大学入試の変化にどう対応するか?

COVER 株式会社WiShip 個別塾グループ

総合型選抜・学校推薦型選抜の年内入試の拡大
大学入学共通テストに加わった「情報Ⅰ」対策
大学入学共通テスト非受験者の動向

2022年度から高校で始まった新しい学習指導要領に基づく教育課程に対応し、2025年度入試より「新課程入試」がスタートする。少子化による大学進学率の増加や入試パターンの多様化、大学入学共通テストの教科・科目の再編など、さまざまな変化に対して学習塾はどのような進路指導や学習支援が求められているのだろうか。

今回は、高校生向け学習塾の運営や映像コンテンツの提供などを行う4社にお集まりいただいた。総合型選抜・学校推薦型選抜の年内入試の拡大、大学入学共通テストに加わった「情報Ⅰ」対策、大学入学共通テスト非受験者の動向、地方と都市部の人口問題の影響、ICT教育における先生の役割の変化など話題盛りだくさんの座談会をリポートする。

座談会参加者（50音順）

（株）市進ホールディングス　常務取締役 （株）ウイングネット　代表取締役社長	荻原 俊平 氏
（株）ジャスメック　誉田進学塾グループ 代表取締役	清水 貫 氏
（株）城南進学研究社 専務取締役 執行役員COO	千島 克哉 氏
創英グループ　（株）シェアードウェイ 統括	斉藤 淳 氏
進行	西園寺 弘 氏

西園寺　はじめに自己紹介をお願いします。

荻原　首都圏で展開をさせていただいております市進教育グループの塾・予備校部門での高校生指導は、集団指導、個別指導、映像授業の三つの運営形態をおこなっていますが、いずれも自社グループ作成を中心とした映像授業を活用し、学習塾・予備校事業のトータルサポートをおこなっています。また市進学院・市進予備校のノウハウを駆使した授業や教材は、全国の学習塾・教育機関3000以上の拠点でご利用いただいています。

千島　城南進学研究社は1961年に大学受験予備校として創業しました。現在は主に、フランチャイズを含む約200教室の個別指導塾「城南コベッツ」と、映像授業による「河合塾マナビス」22教室の2軸で展開しています。本日は生徒の特性や志向に基づいたリアルな現状をお伝えしたいと思っています。

清水　誉田進学塾グループは、中学受験部・高校受験部は集団指導塾、大学受験部は東進衛星予備校のみです。東進はこの夏10校舎となりました。この座談会では、難関大学受験生の視点を中心にお話しできればと思います。

斉藤　高校受験を中心に神奈川県と東京都で創英ゼミナールを展開しています。グループ企業の（株）シェアードウェイ・東進衛星予備校は神奈川県内に25校舎です。私自身はもともと創英ゼミナールに所属し、3年前にシェアードウェイに転籍しました。

拡大の一途をたどる年内入試
道が拓けたと一概に言い切れない

西園寺　先日、慶応大学医学部が栃木県出身の高校生を対象に、卒業後県内の医療機関での勤務を条件に、年に1名の地域枠を設けると発表しました。こうしたさまざまな動きがあり、年内入試の枠は拡大傾向にあります。個人的には〝入試パターンによる損得〟があるのではないかと感じています。まずは、年内入試に関する見解をお聞かせください。

千島　なんといっても東洋大学が年内入試を仕掛けたことには驚かされました。学校推薦型選抜の立て付けですが、マークシート、2教科の入試で中身は完全なる一般選抜です。定員は600名弱ですが3000名前後の合格者を出すでしょう。手続きの締め切りは2月末のため、合格者は上位大学を中心とした戦略的な出願が可能になります。来年以降、他大学も追随する可能性があり注視しています。

清水　年内入試の流れはさらに進み、二極化が予想されます。人気の揺り戻しもありながら、この先いつ頃バランスが取れた状態になるかを予測するのは難しく、少なくとも5年ほどは上下変動しながらも拡大傾向が続くと見ています。

荻原　私も年内入試は拡大の歯止めが効かないと捉えています。年内入試を目指す生徒にとっては自分のペースでやりたいことを達成していくメリットがあり、それに対して入試体制を作る側が仕組みを合わせていく形が加速していくと思われます。

斉藤　年内入試を活用して合格する生徒は、そのまま一般選抜でも合格する実力者です。つまり、「優秀な生徒にはチャンスが増えて年内入試で合格する」というのが現場の感覚です。

翻って、個別指導塾では一般選抜の壁を越えようとする猛者はほぼいません。しかし、年内入試を目指すライバルたちの実力は圧倒的ではるかに高いレベルです。一般選抜では立ちいかない生徒が総合型入試をはじめとする年内入試を目指しても、一定レベル以上でないとはじき返されかねません。ですから、年内入試のおかげで道が拓けたとは一概に言い切れないと思います。

また年内入試の拡大に伴い、私自身は

進行
西園寺 弘
教育評論家。1955年生まれ。月刊誌記者のアルバイトをしながら東京都内の大学、大学院に通う。卒業と同時に1年間の海外遊学。帰国後、私立高校社会科講師、専門学校英語講師を経て大手塾に5年間勤務。退社して以後は教育関連、特に学習塾や英会話教室関連の執筆活動に専念している。民間教育の現場に詳しい。

一般選抜が削られるのか、指定校推薦が削られるのかに注目しています。指定校推薦を削るのであれば個人的には大賛成ですが、一般選抜が果たしてどこまで食われるのかは未知数です。

千島　東洋大学では一般選抜から削られるようです。

斉藤　そのように先陣を切った東洋大学の動きを、他の大学がどう捉えるか注視していきたいと思います。

荻原　年内入試の拡大、もとより多様化が進む時代において、大学入試のキーワードのひとつとして「リメディアル教育」があります。子どもは、目的・目標を持って大学に進学するわけですが、スタートの時点で基礎学力＝土台に開きがあるケースが増えている。つまり、そこを大学、公教育、民間教育がそれぞれの役割を明確にして、子どもの将来を支える意味も含めた入試制度が必要だと思います。

（株）市進ホールディングス　常務取締役
（株）ウイングネット　代表取締役社長　荻原 俊平氏

大学進学率はどこまで上がるか 2040年には62%となる予想

西園寺　先日開かれた中央教育審議会の大学分科会と高等教育の在り方に関する特別部会の合同会議によると、2023年の18歳人口は約110万人、大学進学者は約63万人、2040年には18歳人口82万人、大学進学者数51万人との数字が示されました。進学率は58%から62%に上昇します。学習塾にどんな影響が出るのでしょうか。

千島　MARCHレベルや中堅大学の難易度に着目すると、2040年代の中堅大学はほぼ全入となり、私たちが認識している中堅大学の難易度がそのまま1つ上のランクに移行すると考えられます。また、足元においてMARCHレベルを目指す生徒には、共通テストの受験を回避させ私大対策に特化させる指導も増えてくると思います。

荻原　少子化によって母集団が減り、「行きたい大学・学部に行ける層」が増える中で、「やりたいことをやりながら充実した高校生活を送り、将来に備えたい」という子どものニーズに応えることは、学習塾の新展開、予備校における生徒数確保に大きく貢献します。個別最適化による〝一人ひとりに合うオーダーメイド〟のニーズは、少子化に伴いますます拡大していくと考えられます。

西園寺　地方の公立トップ高校が上位2、3校を除いて定員割れを起こしています。いずれは大学も同じ状況になることはあり得るのでしょうか。

清水　確かに、地方の高校入試の状況から大学入試を類推できると思います。千葉県の例で言えば、都市部寄りエリアの難関高校は公立・私立とも倍率が高いのですが、下位の高校は定員割れを起こし、郡部ではトップ校でも倍率は1・0倍を超えるかどうか、それ以外は定員割れの状況です。

千葉県の公立高校は返還を経て、推薦入試の枠組を廃止し、学力重視の高校入試に揺り戻して整理しており、大学入試も同様の方向性が予測できます。ただ、高校入試は県教委と私学協会によって受験日程の協議などの調整が行われますが、大学入試ではどれほどコントロールする力があるかは未知数です。まさに、前倒しと揺り戻しを繰り返して混沌とする状態になりそうです。

西園寺　大学入試もある程度の線引きはありますが、オープンキャンパスの実施時期の前倒しなど、線引きが守られていないのが実情です。高校入試の状況から類推すると〝何でもあり〟の状況になっていくことが危惧されます。

清水　分母の高校生が減ることに対して進学率がどこまで上がるのかが、もう1つの論点ですが、私自身は進学率はどこかで止まる、あるいは止まりかけていると感じています。

〝勉強はこりごりだ〟という層が一定数いて、その一線を越えさせるのはなかなか難しいと思います。民間教育機関として子どもたちにそういうマインドを持たせたくないのは言うまでもありませんが、現状からすると高校の段階で勉強したくない生徒が大勢いるのも事実です。

地方と都市部の人口問題が深刻化 地方創生が国公立大学の生命線

西園寺　地方と都市部の違いを考察すると、例えば秋田県の大学の進学者数は3127人です。そのうち国立大学進学者は1064人でおよそ34%を占めます。全国でも国立大学進学率は秋田県が最も高く、一番低いのが神奈川県です。

神奈川県は大学進学者数4万5536人のうち、国立大学進学者は2954人でわずか6・5%に過ぎません。魅力的な私立大学が身近に多くあり、また一都三県の国立大学はレベルが高いことが理由だと考えられます。

千島　都市部には魅力的な私大が多くありますので、国立大進学率が低いことは理解ができます。一方、地方の国公立大学は都市部からの流入を期待するのでしょうが、こちらもこれまで以上に都市部の生徒の獲得は難しくなるでしょう。共通テスト離れが進む可能性が高いからです。共通テストはセンター試験のように基礎学力を問う試験ではなく差がつく試験となりました。私大とは出題傾向も異なりますので対策に要す時間はセンター試験とは比較になりません。この流れから都市部の受験生が地方の国立大を併願する機会は自ずと少なくなっていくものと考えられます。

（株）ジャスメック　誉田進学塾グループ
代表取締役役　清水 貫氏

清水　地方では東京や関西など都市部の大学に進学すると、地元に戻って就職をしないことも問題だそうです。また、旧帝国大学に進学する生徒以外は地元の国立大学を目指し、それ以外は勉強しなくても地元の私立大学なら入れる状況ですから、高校生が塾に通う必要性を感じていないという話はよく耳にします。大学や教育という大きなテーマの議論以前に、地方と都市部という構造における社会的な人口問題の影響が強いことを痛感します。

千島　地方の国立大学でユニークだと感じたのは福井大学の恐竜学部創設です。化石の発掘事例が多く観光の起爆剤となっておりますが、これを大学の学びと結びつけるのは技ありです。首都圏からの受験生も増えそうです。一方、北陸地方のある国立大学では、運営費交付金や研究費が大幅に削減されたようです。研究の面白さ、クオリティを保てる保証がない場合、首都圏の受験生の目に留まることは益々難しくなるでしょう。ワクワクするような学びをいかに受験生に示すことができるか？この点が地方国公立大学の生命線になると強く感じています。

大学入学共通テストを考察 学校での勉強が点数に相関しにくい

西園寺　国公立大学はどこでどんな学びが得られるのかが受験生に伝わりにくいことが課題です。研究の成果を難しい言葉で語るのではなく、わかりやすい言葉で魅力が語られるべきではないでしょうか。

西園寺　大学入学共通テストの受験者数は年々減少しています。これまで常に50万人以上でしたが、今年は46万人を切りました。かつては90%が受けていた時代もありましたが、昨年は大学入学者の75%に留まって

（株）城南進学研究社
専務取締役 執行役員COO　千島 克哉氏

います。

千島　大学入学テストは誰のためのテストで、何を目的とするのかが明確ではないと感じます。センター試験は高2終了時までの基礎学力を問う試験で、私大受験生にとっても親和性が高いテストでした。共通テストは新学習指導要領に則った試験とはいえ独特の存在感のあるテストです。情報を素早く処理するという新たな能力が問われています。教育改革の目玉である学力の3要素を試す試験に確かになっていますが、入試改革として適切かというと疑問が残ります。

斉藤　国公立大と私大との併願者は減少していますが、一方で大学入学共通テストを活用して私大に合格しようという戦略をとる層は、まだ一定数いるように思います。

荻原　民間教育としては入塾を早期化して滞留期間を長くすることが戦略上あり得ますが、高校1年生から大学入学共通テストのために通塾させる、その層を増やすためには中学3年生からの継続が前提と言えるでしょう。

清水　おっしゃる通り、私も情報処理能力側に少し寄り過ぎている印象を抱いています。表現力を問う記述式問題が検討されながら、結局は外されたことが原因かもしれません。

ただし、さっと見て概略を素早くつかみ、処理して結果を出す能力は大学入学共通テストで測り、難関国公立大学は個別試験で思考力を見るという位置づけだとするならば、実は悪くないとも言えます。

いわゆる知識詰込み型ではなく、大学入学共通テストはその場で判断して、考えて処理する力を見るテストです。枝葉末節を突っつくような知識型の問題と比べれば、こちらの方がよいと言えるかもしれません。

ただし、学校の教科書で勉強した学力に相関しにくく、ただ真面目に努力すれば点数が取れるというテストではないと思います。

過去問がない「情報Ⅰ」の対応策 直前の集中講座や模試の復習を

西園寺　2025年度から新たに加わる「情報Ⅰ」への対策についてはいかがでしょうか。

斉藤　模試でシミュレーションしたところ、成績上位層の生徒たちの結果からは、内容的に難しいというほどではないという印象です。

千島　学習指導要領上は高校2年生までに履修するルールですが、ほとんどが高校1年次に履修します。高校1年生で習ったことが2年間のブランクを経て大学入学共通テストで扱われるのは酷な話です。私たちは直前の冬期講習の集中講座で十分に対応ができると認識しています。

清水　「情報Ⅰ」を配点しない大学もあります。また旧課程の「情報」よりも判断力や考える力、読解力を見る方向に出題するようですが、中身自体が〝情報教育〟かどうかは曖昧な気がします。

国語の「論理国語」に似た部分もあり、また数学の「統計分野」もはみ出してきた印象です。試作問題を見た限りでは、難関大学を狙う生徒にとって「情報Ⅰ」の学力があるかどうか以前に、差がつかないのでは、と思います。

また、「情報Ⅰ」が加わったことによって、プログラミング教育の重要性が認知されて世の中に広まるほどの影響力はないと思います。

千島　少なくとも1年間・週1回学ぶような講座設計はふさわしくないと思います。

斉藤　模試を受けてその復習動画を見ておけば十分だろうと、私は判断

千島　学習塾に通い、時間配分なども含め適切な指導を受けている生徒と、通塾せず自力で対策を練る生徒では大きく差が開いてしまうのではないかと思います。

しています。

清水　従来の流れから、初年度は手探りで難しい問題にはせず、再来年は難しくする可能性がありますが、翌年はまた易しくなると予測しています。

注目の入試パターン「総合型選抜」〝やれば受かる試験〟ではない

西園寺　総合型選抜にはどのような対策をしているのでしょうか。

斉藤　創英ゼミナールでは「SDGsカリキュラム」という目には見えない能力（非認知スキル）を伸ばすカリキュラムによって総合型選抜の合格率を上げることができています。

一方、東進衛星予備校の生徒たちも同様にSDGsカリキュラムを実施しておりますが、もともと総合型選抜での合格を目指していたというよりは、〝脇道に寄り道する感覚〟で特別な対策をしなくても合格しています。

創英グループ　（株）シェアードウェイ
統括　斉藤 淳氏

清水　生徒一人ひとりの向き・不向きの相対的な位置関係、絶対的な能力の得意・不得意は本人や保護者にはわかりにくいので、相談しながら個別に希望に応じて対応しています。

千島　弊社では城南推薦塾が専門で担っています。対策を立てるうえではアドミッションポリシーに紐づく試験対策が必要です。出題傾向の分析と具体的な対策を個人レベルで行うには相当な労力が必要となります。

西園寺　ここ1・2年で総合型選抜の傾向はどんな変化があるのでしょうか。

千島　城南推薦塾の集客は一昨年頃から非常に順調です。好調である理由は需要に対する供給が追い付いておらずアンバランスな状態にあるからです。通り一辺倒の対策ではなく、学部・学科に根差した対策ができていること、そして実績がついてきていることで生徒から選ばれているものと認識しています。

高校1年生から通塾する生徒も増えています。実際、合格するための学びは社会に出てからも役に立つこと、応用できることが多くあります。一昔前とは異なり、それを面白いと思う生徒や保護者が増えているのだと思います。総合型選抜は入試の選択肢として市民権を得た印象を持っています。

荻原　市進予備校も同じ状況です。慣れ親しんだ塾に、高校生になっても通いたいという声も含めて、総合型選抜に向いている生徒の中には、対策コンテンツや添削、チューターの模擬面談サービスに対するニーズがあります。こういった層を増やしていくことは、高校生を抱える学習塾の生命線だと言えます。

中学生から高校生への継続には 指定校推薦がアピールポイントに

西園寺　指定校推薦対策は、どういった学習指導を行っていますか。

荻原　学校の成績を高1からきちんと取り続ける必要があるので、子どもが中学部在籍の頃から保護者面談で「この大学に行くためには、これから、そして高校生になっても、一緒に勉強しましょう」と、子どもの将来を考えた、本質的な進路指導をしていくことが重要です。志望する高校に大学の指定校推薦枠があることを把握した上で、進路指導のウリのひとつに据える学習塾は多いと思います。

斉藤　創英ゼミナールでも中学2・3年生の頃から高等部に継続的に通ってもらうための戦略上、「この公立高校で一番手・二番手に位置すること

大学入試の変化にどう対応するか

創英グループ
（株）シェアードウェイ
統括　斉藤 淳氏

（株）ジャスメック
誉田進学塾グループ
代表取締役　清水 貫氏

（株）市進ホールディングス　常務取締役
（株）ウイングネット　代表取締役社長
荻原 俊平氏

（株）城南進学研究社
専務取締役 執行役員COO
千島 克哉氏

ができれば、この大学の指定校推薦を狙える」という話をして高等部への継続を促しています。

実際、勝負が決まるのはほぼ高校1年生です。高校受験の際、目指す高校で上位の評定を狙うように進路指導をした中学生が、高校に入学して指定校推薦でMARCHに合格するのが成功事例です。

千島　実際には、自身が通学している高校にどのような推薦枠があるのかを知らない生徒や保護者が非常に多いです。まずは、そこを調べるように促しています。また、中3生への受験指導においては、高校側が持っている指定校推薦を伝え、あえて志望校をワンランク下げて高校での評定平均を高くすることによって指定校推薦枠を取りに行く方法もあるという話しもします。行きたい大学・学部の推薦枠が高校にあることを知って、明確にそこを目指す意思があれば私たちも背中を押します。

斉藤　指定校推薦に関していうと、東進衛星予備校の生徒には主に2つのパターンがあります。高校1年生から3年後の国公立大学を目指す層はオール5に近い優秀な成績で、〝思いがけず〟いい大学の指定校推薦が取れます。

一方、指定校推薦の夢に破れて塾に通い始める生徒もいます。つまり、内申の評定が足りずに断念せよと突きつけられて、一般入試にするしかないからと入塾を決めるケースです。

西園寺　塾に通う子どもの数は減っていますが、唯一、集客の可能性が高いのは学校推薦型選抜対策だと考えられます。定員割れしている地方の公立高校に入学した生徒でも、中学生と同じように週2回ほど塾に通えばGMARCHに合格する可能性があるというのは大きなウリになると思います。

これまで大学受験指導は手が伸ばせなかった地方塾でも指定校推薦と公募推薦の学校推薦型選抜をターゲットにすることで、通塾生徒数は増えるのではないでしょうか。

千島　私立大学の指定校推薦枠が、高校の在籍生徒数の数よりも多いケースもあります。つまり、えり好みをせずに手を挙げれば合格できるわけです。それこそが、子どもたちが学びに向かわない原因であり塾離れの要因ともなっています。一方、正しく目標設定を行い継続的に勉強することができれば、実力以上の大学に合格ができるチャンスともなります。このプロセス管理を塾のサービスに取り入れ、ローカルでの集客、成長戦略に織り込むことは合理的であり積極的に取り組むべきだと思います。

清水　あくまでも「学校の定期試験前に試験勉強をするのは当然の習慣」であるという部分にこだわりつつ、「テストの点を取るためだけの勉強は勉強じゃない」と私は唱え続けていきたいと考えています。勉強の本質は点を取ることとは別のところにあるという考えは譲りたくはありません。

ICT教育における先生の役割は生徒の意志の強さを成長させること

西園寺　映像授業を含むICT教材による学習の拡大について、本座談会の最後のテーマにしたいと思います。モチベーションをキープし、自らアプローチできる子どもにとってICT教材は有効な武器です。実際、学習塾の現場における先生の役割はどう変わってきているのでしょうか。

荻原　全国的に学習塾業界を志す人たちの数が不足している状況です。それぞれの地域において、人材を確保する雇用問題と密接に関わる中で、ICTを使うことで、より効果的な学習を成立させる、そこに活躍できる人材を確保することが重要になってきています。

斉藤　個人的には自宅で勉強できることだけをウリにすることは難しいと思います。東進衛星予備校は自宅でも教室でも受講できますが、実際の現場はいかに通塾してもらうかに全力を尽くしています。正直、完全に人が介在しない教育があり得るのかは不明です。

千島　ICT教材の活用は年齢、学力レベルによって活用の仕方は変わります。総合型選抜の対策はオンライン授業との親和性が高いと思います。例えば、城南推薦塾では、テーマに沿った議論や発表の時間があります。また、チームで動いて期日を決めてオンラインで発表するなど、チームに迷惑をかけてはいけないという強制力が働きますので主体性を持って臨まざるを得ない環境が整っています。生徒が仲間と共に学び、成長していく講座設計となっておりますので先生の位置づけは、教えるというよりも伴走するイメージに近いと思います。総合型対策にかぎらずオンライン授業を効果的に活用するヒントがここにあるように思います。

清水　現状、先生にしかできない部分は非常に大きい要素です。子どもの心の成長の度合いに合わせることは、人でなければできないことがたくさんあります。結局、「学び」とは負荷をかけて脳の状態を変えなければならないため、その脳への負荷をあえて選択する意志の強さをいかに成長させるかに尽きます。

斉藤　同じ教材を活用しても、登校率・教材使用率・生徒の学力は校舎長の個性に紐づいて実績が異なります。決して誰でもいいわけではなく、先生が果たす役割は非常に大きいと思います。ただし、ティーチングではなくコーチングを真に理解して実践できる指導者は限られているのが現状です。

荻原　教える部分を効率よく映像授業に任せることによって、生徒の面倒を強化できると思います。子どもを伸ばすことに特化できる人材がどれだけ学習塾業界に育っているかというと、ここは伸びしろがあると言えるでしょう。

清水　コーチングの方がむしろAIに向いているという見方もしています。属人的なコツの部分を技術として標準化できていないため、むしろAIの進化の方が早く超えていくかもと大胆に予測します。そうなると最後に何が残るのか…。「勉強することは面白い」と身をもってお手本を見せることは、最後までAIにはできないことかもしれません。

西園寺　指導者自身が自分の人生で何かにワクワクして学び続ける姿勢が、生徒に伝わる要素も非常に大きいと思います。本日は貴重なご意見をありがとうございました。